
永遠なんか・・・

雪花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠なんか・・・

【Nコード】

N7296B

【作者名】

雪花

【あらすじ】

永遠に祐介と居たい。二人の運命が交わった思い出の海。またこの海で運命が変わる。ずっと一緒に居たい。あなたの笑顔を見たい。

永遠なんてないって分かってるよ。

でも永遠にあなたが隣で微笑んでくれたらと思うと永遠を信じたくなるんだ。

ずっと一緒に居たい。

ずっと私の隣で微笑んでて・・・

5月の風の匂い。

私が一番好きな季節。

祐介と出会ったこの季節。

あの時の5月は、風の匂いさえも感じない程に私は疲れていた。何もかもに絶望を覚えていた。

あの時、

この場所で

祐介に出会えてなかったら今の私は居ないだろう。

海風が強く吹くこの海岸。

3年前に来たきりだ。

祐介は今日この場所に呼び出した。

遠くで手を振る人影。

目の悪い私は少し目を細めた。

「おい！レン！」

私の名前を呼ぶ声。
とても心地いい声。

「遅いッ！」

ふくれっ面の私のホッペを指で突く。

「ごめん。ごめん。」

笑顔で言う祐介はいつもと少し違った。

私はそれを感じ取る。

でも気付かないふりをしよう。

暫くは・・・

「久しぶりだよなこ。」

海を眺めあの時の光景を思い出す。

「あの時さ祐介すっごい剣幕で怒ってたよね（笑）」

「当たり前だよっ！あんなんしてたら誰だって自殺だと思っただろ！」

あの日の私は、全てに絶望してた。

滑り止めたった大学をことごとく滑った。

もちろん志望校もダメだった。

浪人する事にした私は当時の彼に打ち明けた。
大学卒業したら結婚しようと言われてた。
彼は言った。

「大学に落ちた女なんて恥ずかしくて親父に紹介できない。」

頭が真っ白になった。

気が付いたらここに来てた。

海を眺めてこのまま進んで行ったらドラマのシーンみたいにカッコイイ王子様が助けに来てくれるかなって。

そしたら見事に釣れたのが祐介だった（笑）

「思い出し笑いしてんなよ（笑）」

「あの時の事思い出しててさ（笑）」

「本当にレンとは衝撃的な出会いだったもんな。」

「本当に海に駆け込む人なんて初めて見た（笑）」

「一目ぼれだったからな。」

少し赤くなって祐介は言った。

「なにそれ？」

「海を眺めてる子が居るなあ。。。と」

「それで一目ぼれ？（笑）」

「うるさいなあ・・・」

照れ隠しに祐介は乱暴に言った。

横を向いた祐介の耳は真っ赤になってた。

「可愛い。」

「おっお前／＼／　でッ！レンは俺のドコが良かったんだよ？」

「王子様な所（笑）」

「お前なあ（笑）」

暫く二人で黙って海を眺めていた。

二人出会ったあの瞬間を思い出すかのように・・・

あの時知ってたよ。

浜辺に立つ私を見てた祐介の事。

知ってたからわざと海に入ってたんだよ。

あの時、私も一目ぼれだったんだよ。

ふと隣に座る祐介の横顔を見ると表情が曇っていた。

祐介は海を見て深いため息をついた。
なにかを言おうと何度も口を開いては止めてを繰り返してた。

知ってるよ。

祐介が言いたい言葉。

ずっと言いたかったんだよね？

いつも私がはぐらかしてた。

もう少し待って。

もう少しだけ……

「レン……」

切ない表情を浮かべる祐介を見ないふりをした。

「さて！寒くなってきたし帰らない？」

祐介に背中を向けた。

祐介の顔を見たくなかった。

「レンっ！」

「ん？行こうよ。」

「レンこっち向いて。」

祐介の声が次第に涙声になってくのが分かる。

「振り向いたら死ぬかも・・・」

「え・・・」

「ウソだよ。祐介の顔なんて見たくない」

本当は祐介に情けない泣き顔なんて見せたくないから。

「ごめんね。知ってたんだろ？」

「謝らないでよ！何にも知らないんだから・・・」

本当は知ってた。

祐介がずっと私以外の子を見てたって事。
でも知らないふりをしてた。

祐介を縛る為に・・・

「ごめん・・・ごめんな・・・。」

繰り返す祐介の言葉が次第に小さくなっていく。
涙が頬を伝う。

ごめん。

その言葉は私のセリフだよ。

ずっと
ずっと

私は祐介を縛ってたんだから。

「祐介。ごめんね。」

「え？」

私は精一杯の笑顔で振り向いた。

きつと笑顔なんかじゃなかったかもしれない。

泣いてたってすぐ分かってたかもしれない。

それでも振り向いた。

祐介を解く為に・・・

「私・・・浮気してたんだ。ごめんね。別れて下さい。」

精一杯のウソで精一杯に頭を下げた。

私が悪者になればいい。

祐介が居るのに浮気をしたそんな最低な女でいい。

涙が砂浜に落ちた。

それは私の涙じゃなくきつと祐介の涙。

祐介は私を抱きしめた。

「ごめんね。ありがとう。」

泣いてくれた。

こんな女の為に・・・

「祐介なんか嫌いだよ。だいつきらいだから・・・」

「分かってる。」

「嫌いなんだから・・・」

「うん。」

「本当は・・・」

言おうとして止めた。

言ったらまた祐介を縛ってしまうから。

本当はダイスキだよ。

永遠なんてないのかもしれない。

けれども、

一度愛してしまった人の事は忘れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7296b/>

永遠なんか・・・

2011年10月3日21時14分発行